

Life Design Focus

デンマークの福祉機器 — 需要側から供給側までを概観して —

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 水野 映子

筆者は2010年春、スウェーデンとデンマークを訪れた。私的な旅ではあったが、両国の障害者・高齢者に関連するさまざまな情報を得ることができた。特に、スウェーデンでは聴覚障害者について、デンマークでは福祉機器^{*1}について多くのことを見聞きした。前者については既に報告している（水野 2010）ので、今回は後者について紹介する。

<エンドユーザーの状況① ～市街地にて～>

まずは、筆者が最初に立ち寄った首都コペンハーゲンおよび第2の都市オーフスの様子について述べよう。

デンマークの街を象徴するもののひとつは自転車だ。至るところで自転車が走っており、自転車専用道路や駐輪場も整備されている。また、電車にも自転車ごと乗れる。

自転車だけでなく、車いすや歩行補助車（4頁参照）など移動のための福祉機器（以下、「移動機器」）やベビーカーもよく見かけた。移動機器やベビーカーは数が多いだけでなく、日本に比べて概して大きい。平坦な地形や歩行者用・自転車用・車用に分けられた道路など、自転車を使いやすい物理的環境が、移動機器やベビーカーの利用者も街を闊歩できる一因になっているのだろう。

ただし、ハード面の条件が整っていること以外にも要因はあるようだ。帰国後に福祉機器の関係者から聞いた話によると、日本の高齢者は歩行補助車を選ぶ際に小型のものを欲しがるといふ。歩道が狭いという理由だけでなく、なるべく目立たないようにしたいという意向があるからだそうだ。筆者の過去の調査（水野 2004）においても、半数前後の高齢者は歩行補助車や車いすを将来使うことに対して抵抗感があると答えており、移動機器を使いたがっていないことがわかる。一方、デンマークの人にそういった意識があるという話は耳にしなかった。両国の意識の違いも福祉機器の利用に関係していると思われる。

鉄道・道路



電車内の自転車優先スペース



街を走る自転車：歩道・自転車道・車道が分かれている。歩道には、車いすが走りやすいよう路面が平らになっている道（写真左下の矢印）もある。



電車から降りる車いす使用者：スロープは電車の扉付近（写真左側）に格納されている



街を移動する車いす使用者：電動車いすを日本より多く見かけた。左側にはベビーカーが置いてある。



ベビーカー付自転車

＜エンドユーザーの状況② ～学校にて～＞

続いて、オフィスから1時間弱バスに乗り、エグモント・ホイスコーレン（Egmont Højskolen）というフォルケホイスコーレに向かった。フォルケホイスコーレとは、英語では folk high school、日本語では国民高等学校などと訳される北欧独特の成人教育機関であり、デンマークには約80校ある。その中で、エグモント・ホイスコーレンは、およそ4分の1～3分の1の学生に障害がある（同校ホームページより）という特徴をもつ。フォルケホイスコーレは全寮制を基本としており、このエグモント・ホイスコーレンでも学生が生活を共にしている。

校内を見学して感じたのは、障害のある学生が使う福祉機器、特に車いすなどの移動機器がバラエティに富んでいることだ。用途に合わせて複数台を使い分けている学生も多くいる。例えば、スポーツ用の車いすが体育館には並んでおり、屋外移動用の車いすや自転車、バイクもある。学習や食事・入浴・排泄など必要最低限の行為をするための環境はもちろんのこと、生活を楽しむための道具や設備も充実しているという印象を受けた。

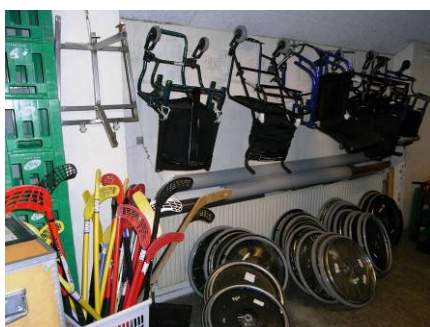
エグモント・ホイスコーレン



中庭からみた校舎：広々とした敷地内には学生寮もある



朝礼の様子：さまざまな学生が在籍している。この部屋で食事をする。



体育館にあるスポーツ用の車いす



手で動かせる自転車



ガレージに並ぶスクーター型電動車いす



奥には障害者用のバイクもある



学校の敷地に面した海：車いすで海に入るためのエレベータ（写真中央）やスロープがある

＜需要者と供給者を結ぶリハビリテーションセンター＞

福祉機器のユーザーを一通り見た後に訪れたのは、デンマーク第3の都市オーデンセにあるリハビリテーションセンター（Center for Rehabilitering og Specialrådgivning =CRS）のモビリティ部門である。このセンターはデンマークの行政区画のひとつである南デンマーク地域（Region Syddanmark）によって運営されている。モビリティ部門は、障害者・児の福祉機器の利用、住宅・自動車の改造、教育・就業に関する相談や支援をおこなっており、福祉機器も置いている。

ここでもやはり、福祉機器の豊富さには目を見張った。例えば、車いすや歩行補助車などの一般的な福祉機器でも、さまざまな種類がある。また、市場が大きいとは思えない特殊なニーズをもつ重度の障害者・児向けの福祉機器もあった。

特に印象的だったのは、子どものための福祉機器が揃っていること。日本の場合、人口が多い高齢者向けの福祉機器に注目が集まりがちであり、子ども向けの福祉機器は一般の展示場や展示会ではさほど見かけない。しかし、子どもに障害がある割合はデンマークと日本で大差ないはずである。日本の障害児には十分な福祉機器が行き渡っているのだろうか、と改めて心配になった。

もうひとつ興味深かったのは、娯楽や嗜好のための福祉機器。日本にもそういった福祉機器がないわけではないが、多くは公的な支給やレンタルの対象ではない。一方、デンマークでは、必要性が認められればほとんどの福祉機器が無償で提供されるとのこと。このセンターには、例えばトランプ遊びや喫煙を補助するための道具もあった。生活に必需の福祉機器ですら高いお金を払わなければ入手できないこともある日本との違いを感じざるを得なかった。

リハビリテーションセンター Center for Rehabilitering og Specialrådgivning



敷地内にある、車いす操作の練習用のスペース



物をつかむための道具（手前）、杖（奥）：さまざまな種類がある



歩行補助車：日本の製品より概して大きく、シンプルなデザイン



レンタル用のおもちゃ



障害児用のチャイルドシート



手に障害がある人のトランプ遊びを補助する道具

<福祉機器の展示会>

デンマーク滞在の最後には、コペンハーゲンで開催された福祉機器の展示会「Health & Rehab 2010」を見学した。この展示会は、東京で毎年開かれる国際福祉機器展に比べると小規模で、展示品も移動機器が中心だが、北欧では最大級とのことである。

ここへ来る前から思っていたことだが、この展示会を見てデンマークらしさを一層感じたのは福祉機器のデザインだ。福祉機器にありがちな冷たさやかっこ悪さはなく、自宅や職場、街中で使う様子を思い浮かべても違和感がない。好みはあるだろうが、

自分なら将来使ってもよいと思えた。

また、展示会そのものの雰囲気も全体的に明るかった。会場では車いす使用者によるダンスやレースなどが催され、来場者を楽しませていた。

福祉機器の展示会 Health & Rehab 2010



多くの人で賑わう展示会の入り口



車いすのレース：写真右下にあるような障害物を乗り越えたりよけたりしながら、一定のコースをまわりタイムを競う。参加者は展示会の来場者。



展示ブース：色遣いが全体的に明るい



<日本にとって必要なことは？>

以上、福祉機器のエンドユーザーである障害者・高齢者、すなわち需要者から供給者までをさかのぼって概観した感想を述べた。

筆者がデンマークで見た福祉機器の特徴を一言で表すならば「幅広さ」である。「幅広さ」とは、ユーザーの年齢層（子どもから高齢者まで）や障害・機能低下の程度（軽度から最重度まで）の幅広さ、用途の幅広さ（必需品から娯楽・嗜好品まで）など、さまざまな意味を含む。

この幅広さの一因が、福祉機器を無料で入手できるという公的制度にあることは間違いない。無料ゆえに需要が顕在化し、結果として供給も豊かになる。

また、「自律」という言葉で語られることが多いデンマーク人の気質も、背景にはあるだろう。デンマークの障害者・高齢者は、日本人のように福祉機器に対して抵抗感をもつことなく、自律・自立のために気兼ねなく福祉機器を使っているように見えた。

こうした社会的な制度や意識に加え、福祉機器を使いやすい物理的環境など、さま

さまざまな要因が入り混じって、前述の幅広さが生じていると考えられる。今回は福祉機器のを中心にして述べたが、設備や空間、あるいは介助・介護のような人的サービスについても同様の幅広さがあると想像している。デンマークの福祉を支える高額な税負担に対する議論はさておいても、福祉機器をはじめとする障害者・高齢者向け製品・サービスの幅広さについて日本が見習うべき点は多いだろう。

一方で、日本のほうがもしかしたら進んでいるかもしれないと思う点もあった。一般向けの製品・サービスを障害者・高齢者に使いやすくする、あるいは障害者・高齢者向けの製品・サービスを一般の人に使いやすくすることによって利用者層を広げるという、いわゆる「ユニバーサルデザイン」の考え方だ。やや皮肉な言い方になるが、日本で、特に民間企業でこの考え方が普及した一因は、障害者など少数のユーザー専用の製品・サービスを提供しても、公的な補助が少なくユーザーの負担額が大きいため市場が成立しにくい、という制度的環境にあるとも考えられる。こうした環境自体は良いと思えないが、多くの人にとって使いやすい製品やサービスが結果として生み出されているならば、その点は評価できる。日本は、デンマークなどの諸外国から優れた点を学ぶと同時に、自国の優れた点を見直しアピールすることも必要ではないか、と今回の訪問を通じて改めて感じた。

(みずの えいこ 副主任研究員)

【注釈】

*1 デンマークでは「補助器具 (hjælpemiddel)」と呼ばれており、日本における「福祉機器」「福祉用具」よりやや広い概念でとらえられているが、ここでは便宜的に「福祉機器」という表記に統一した。

【参考文献・ホームページ(HP)】

- ・ 水野映子、2010「スウェーデンの聴覚障害者 ―日本との比較を通じて―」『Life Design REPORT (2010年10月号)』
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/watching/wt1009.pdf>
- ・ 水野映子、2004「ベビーカーからシルバーカーへ」『Life Design REPORT (2004年5月号)』 <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/watching/wt0405a.pdf>
- ・ エグモント・ホイスコーレンのHP (英語) <http://www.egmont-hs.dk/english>
- ・ エグモント・ホイスコーレンについて書かれたHP (日本語) <http://egmont.jp/>
- ・ (株)グラディエ 磯村歩氏 (筆者が訪問当時、エグモント・ホイスコーレンに在籍)のHP (日本語) <http://isoamu.exblog.jp/>
- ・ CRSのHP (デンマーク語) <http://www.rehabilitering-fyn.dk/wm149312>
- ・ Health & RehabのHP (英語) <http://health-rehab.com/Forside.1016.aspx>